

南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ



第15回 コドモの貧困を考える

日本では、6人に一人の割合で、コドモが貧困に苦しんでいるのだそうです。

ミナミの国の話ではありません。イマイマ現代の日本の話です。ミャンマーやカンボジアでは、「貧困」のコドモは、すぐにそれと分かります。学校に行かず、汚れた服を着て、観光客相手に得体の知れない雑貨を売ったり、歌を歌ってお金をもらったりしています。アンコールワットに行くと、あの荘厳な寺院の入り口にかかる橋の中ほどで、川に飛び込むコドモたちがいます。ほとんどの観光客は、そのまま通りすぎますが、お金を渡す人がいるのでしょう。川から上がっては飛び込み、また上がっては飛び込みを、何度も何度も繰り返しています。お金をあげるのが良いのか、彼らの家族の働く意欲を削ぐから、渡すべきではないのか、とても難しい問題です。

けれど今の日本、私たちのまわりに、そんなコドモは見あたりません。だから、コドモの貧困といっても、びんと来ない人がほとんどだと思います。いまの日本、「貧困のコドモ」は、どこにいますか。そもそも、貧困といってもコドモは働いていないので、どうやって判断するの？と、不思議に思う方もいらっしゃるでしょうね。

コドモの貧困率は、まず一世帯あたりの収入を家族の人数で割って、一人あたりの可処分所得を計算します。人数に応じて、所定の調整を加えるので、単純な割り算というわけではないようです。このようにして計算した可処分所得のちょうど半分を、「貧困線」といいます。コドモの貧困率とは、18歳未満で、この貧困線以下にいる人の割合のことをいいます。

コドモの貧困率は、1990年代の半ば頃から増えつづけ、ついに昨年、16%にまで達したという調査結果が厚生労働省から発表されました。この16%を基に、6人に一人が貧困という数字が導きだされているのです。なかでも、離婚や死別で、親が一人しかない家庭の貧困率は、さらに高いという数字も出ています。

なんだー。
単なる比較の問題なのね。コドモの貧困といっても、アジアの国々に比べて日本人の可処分所得は高いのだから、大げさに考えることはないんじゃないの？

なんて、思わないでくださいね。

私も、戸沢財団の仕事をしていなかったら、この日本で「貧困」という言葉に現実味がなく、遠い世界の出来事だと興味を

持たなかったでしょう。
コドモの貧困は、私の想像をはるかに超えていました。

もう何年も、一日一食しか食べていない。
給食のない夏休みは、お腹が空いても、食べるものがない。
お金がないから、夏休みは学童保育に行けない。
就学補助金は、家族の生活費に消えるので、高校の授業料が払えない。
学校から帰ったら、コンビニや工場で働いて生活費を稼いでいる。
保険証がないから、体調が悪くても病院に行けない。

これらはすべて、現代の日本の話です。そして、その多くが母子家庭でおきています。日本では、女性の労働単価は男性よりはるかに低く設定されているからです。しかもコドモが小さいうちは、フルタイムで働きたくても、正社員での就職は難しいのが現実です。

世間には、こういう母子家庭を支援しているNPO法人もたくさんあります。フードバンクもその一つです。フードバンクとは、一般家庭や会社で余っている食料を集めて、「貧困家庭」に届ける活動のことをいいます。

財団を通じて知り合ったフードバンクの方は、手弁当でその活動をされていました。食料は、企業に頼めば簡単に集まるのだそうです。けれど、集めた食料を保管する倉庫代や、各家庭に届ける送料は、寄付でまかなうしかありません。もっとたくさんコドモたちに、お菓子や食事を届けたいけど、チカラ不足なのよね…と言いながら、理事長はコドモたちからもらったお礼の手紙を、嬉しそうに見せてくださいました。

私は思わず、聞いてしまいました。

それって、自治体の仕事じゃないの？
どうして、民間がやらないといけないんですか？
本当に苦しいなら、生活保護という制度がありますよね？

けれど自分の力で頑張りたいと、生活保護を申請しない人はたくさんいるのだそうです。特別なスキルがなければ、フルタイムで働いても、パート雇用では月に12～3万円程度しか稼げません。そして、そういう人たちを救うソーシャル・ネットは、いまの日本には全くと言っていいほど、存在しないのだそうです。

とはいえ、イマドキ離婚は珍しくありません。私の周りにも、バツイチで子育てしているママはたくさんいます。でも、彼女たちが貧困に喘いでいるかという、そんな事はないように思い

◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ30名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に「小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本」「小さな起業のファイナンス」(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食っていくための土業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

ます。もちろん、外から見ただけでは、他人のフトコロ具合は分からないので、想像でしかありませんが、食べるものにも困っているとは、とても思えない。家族で旅行に行ったり、お稽古ごともさせたり、大学に進学させたりもしています。
だから、フードバンクの理事長の話は、衝撃的でした。
なぜ、「貧困」は起きてしまうのだろう？

その答えは聞けず、私の中のモヤモヤ感は消えませんでした。

貧困は、DVを生み、教育格差を生み、さらなる貧困格差を生みます。
母子家庭の貧困は、なぜ生まれるのだろう？
どうすれば、解消されるのだろう？

そんな思いでいたところ、あるNPO法人と出会いました。東北の母子家庭を対象に、母親にパソコンスキルを教える団体です。パソコンスキルが身につけば、自宅にいながら、今より高収入があげられます。コドモの貧困は、母親の貧困です。単にお金をあげるのではなく、母親に技術を教えるという考え方は、素晴らしいと思い、財団として支援を申し出ました。

ここでも、状況は同じでした。いえ、もっと悪いかも。知らない。「仮設」に住んでいたり、学校が流されたりして、遠くまで通学しなければならぬので、送り迎えの時間確保のために、ひとり親のママたちは、フルタイムで働くことができません。収入はせいぜい、月に7～8万円。それでもママたちは、生活保護を申請しないのだそうです。

さらに衝撃的な話も聞きました。NPO法人が、無料でパソコンを教えると申し出ても、たいていは断られてしまう。何度も自宅に通い、説得に説得をかさねて、やっとパソコンの勉強をしようという気持ちになってくれるまで、時間がかかるというのです。

どうしてですか？
本当の理由は、分かりません。東北という地域性かもしれませんが、一つ言えることは、彼女たちは現状維持を望んでいる。変化を望んではいないのです。

え、どういうこと？
私の頭は思考を停止してしまいました。今よりよくなる可能性があるのなら、ダメ元でやってみればいいのに…。
なぜ、そういう心理状態になるのか、そのNPO法人の方も答えを持ってはいませんでした。

世の中には行政の支援の網から、抜け落ちた「貧困」のコドモたちが、確かにいること。
コドモたちを貧困から救うことができるのは、やっぱり(母)親しかいないこと。
けれど貧困から抜けだそうというパワーさえない母親たちが、現実にいること。

財団の活動を通じて、コドモの「貧困」問題に取り組みたいと思っても、正直、何をしたらよいか、分からなくなってしまいました。その根の深さを、チラリとですが、かいま見てしまったからです。
私自身、結婚をし、税理士の資格を取り、子育てしながら働き、ガムシャラに生きてきました。資格をとるための勉強ができる、それだけでも恵まれた環境にいるのか、それとも努力をしないのは個人の資質の問題なのか、私には答えが見つかりません。
けれど、これだけは確実に言えます。現状を変えるには、莫大なエネルギーがいる。そして世の中には、他人から手を差し伸べてもらわないと、そのエネルギーすら湧いてこない人がいる。そういう人を助けようと、人生をかけて草の根的な運動をしている人がたくさんいるのです。
普通に暮らしているだけでは気がつかない世界があるということ。を伝えたくて、今月はちょっとヘビーなテーマのお話をしました。

新刊発売

ひと月3分、ムダ0確定申告

原 尚美・山田 案稜 著(技術評論社) 1,580円+税

経験や知識がゼロでも青色申告したい人のために、税理士が教えなくなかった最強の節約術を、フリーランス目線で解説した確定申告本。7割の人が見落としている経費や、落とせる経費と、落とせない経費のぶつちやけ境界線など、めんどろな申告を1秒でも早く終わらせたい、悩ましい経費の悩みをゼロにしたい人にオススメです。

